◇講演◇

「幼児との教育」の中で学んだこと

――教師も幼児と共に成長しているだろうか――

河辺　杲

・はじめに

この時間では、幼稚園生活における私の心に残っていることのいくつかを、少し申しあげてみたいと思います。いまは大津市の教育研究所に勤務しここでは幼小中の先生方の現職研修全般の問題ならびに教育相談の仕事をおもに担当しております。さらに市教委に十三年勤務し幼稚園教育を担当してきた経験と、六年間幼稚園にいたという立場から、今やかましくいわれております幼児期の教育のみでなく、もう少し小学校低学年も含めての幼年期の教育の問題について少しずつ、いろんな角度から検討するということが、私に課せられておりまして、これらの仕事をやり始めております。でも、一日も早くもう一度幼稚園の生活に帰りたいという気持ちが現在の私の中にまだむらむらとしております。なぜそういうふうに幼稚園の生活に未練を感じているか、ということが、これから申し上げるいくつかの話の中で、皆さんに感じていただけるのではないかと思います。

・子どもは毛穴で感じとる

まず一番初めに皆さんに申し上げたいことの一つは、幼児と接していて、本当に「これが人間味というもの」ということについてしみじみと見せつけられたように思うことです。もっとちがった言いかたをすれば、いま大人が失いかけているような「人間性」――私は「人間味」と言いたいんですけれども――そういうものを再発見したとでもいいましょうか、そんな所が私が幼児から学んだ一番印象深いことの一つです。

その具体的なものの一つとして、幼児は、身のまわりにいる人とか、物に対して、毛穴で感じとっていると言ったらよいような点にしばしば接することができます。

たとえば、私がちょうど園長になって間もないころのある日、私が廊下を歩いていますと、背後からトコトコという足音が感じられたものですれから、ふと振り返ってみますと幼児たちは互いに顔を見合わせて笑っています。よく見ると上靴をはかないでい

ることがわかりました。「はき物をはかないでどうしたの」と聞くと「園長先生また下へ降りるでしょ」と言うんです。その時私はハッとしました。私のあとをついていながら私の行動をずっと見ていたのだということを知り（別に悪いことをしたおぼえはないのですが）ゾッとするものを一瞬感じました。しかしその瞬間私は「これ上靴なのだよ」といってしまっていたのをおぼえています。それは、その時の上靴はちょうどカーシューズのような黒い靴で、子どもたちに下靴のように見られているかもわからないと感じたからです。しかし幼児たちのニコッとした笑顔がかえって来ただけで、なにか自分がひとりで勝手に一生懸命に自己防衛しているのがはずかしくおかしく感じられました。さらに次の瞬間、ひょっとするとルールがわかっていないのではないかということがひらめきました。

ところで私の園には、中庭にままごとあそびのできる小さな家があり園舎からこの小さな家に行く通路が二方にあって、その通路がコンクリート敷で一方の通路は屋根がついていないんですがもう一方の通路は屋根がついていて、いわゆる渡り廊下のようになっております。この両方のコンクリートの通路だけは上靴でもいいことにしてあったわけです。入園後すぐに子どもたちにもこのことはよく知らせてあったはずなのですが、まだ充分徹底しないのだなとも思いました。そして「園長先生また降りるんでしょ」といったのは、園長は同じ靴のままで中庭に降りたり廊下にあがったりしているというようにききとれもしました。園長のあとを追って歩こうと思えば、上靴にはきかえる間がないわけです。だから下靴を後ろに持ったまま素足で廊下を歩いて私のあとをついてまわり、また私が中庭に降りれば、すぐ下靴をはいて出ようと思っていたらしいのです。その時にはぴんとこなかったのですけれども、あとでよく考えてみましたら、いろいろの園生活のルールがどれほど子どもたちに徹底しているかということもさることながら、非常に子どもたちは私たちの気がつかないでいるところで、行動を見て感じとっているということつまり、この毛穴で感じとっているとでもいいたいようなものは、こんなことをこのように経験させればよいと計画的意図的に教えようとしている以外のところに、案外たくさんあるということをまざまざ幼児から教えられたといってよいでしょう。なおこの時「ルールがわかっていないのではないか」などと指導内容なり形式的なしつけそのものにこだわらずに「園長のあとをついてまわりたいのだな」となぜもっとすなおに子どもたちの心を感じとれなかったかと自分の感受性の訓練をもっとしなくてはと強く感じさせられました。

こういうことがほかにもまだまだたくさんあるわけです。たとえば、先生たちが気になると言われるような子どもの中に、とっ

ても自閉的な子や、また毎朝のように先生の髪の毛を引っ張って、ぎゅうと握った手の指の間にはいつも三本ほどの髪の毛がついているというような乱暴な行動をする子ども、朝早く来て、先生がおはようと言う前に先生の手のところにかちっとかみついて先生の腕には必ず毎日歯型や爪の跡がつくような子どもなどがいました。そういう子どもを、先生たちがどうしていいのかわからないで四苦八苦しながら指導の工夫をされているのを見て、私なりに側面からこれに協力しようと職員室の一隅に、少しプレイルームのようなコーナーを作って、そこに刀だとかピストルだとか、そういう普通の保育室には置かないような攻撃的な遊び道具などを置いて、これらの子どもたちが私のところで遊びたいと思えば自由に遊べるように準備して、大体一時間ほど一緒に遊んでその中で治療保育のようなことをしていたわけです。

ある日、時々園長室に遊びに来る年少のH児が「あの園長先生のところへいくとおもしろい怪獣やら、それから仮面ライダーのような人形だとか、刀だとか、保育室にはないようなものがたくさんあるよ。」というのでひとりの友だちを連れてやってきました。私もその時「一緒に入れてやろうかな」と思ったのですが、それをやりますと誰でも入れるということになって、とても部屋の中が混乱するだろうというふうに感じたものですから、「ここはね、いまはH君だけ遊んでもらうが、もう一人のお友だちはね、この廊下で待っててもらおうね。お部屋のところに帰ってH君がまた出たら一緒に遊ぶよと言ってちょうだい」と言ったんですけれど、なかなか帰さないんです。私がそのように友だちの方に話をして職員室のドアを閉めましたら、H君はそのドアーを少し開けて、そこからのぞいとれというわけで、自分が中にいる間廊下に友だちを待たせておくわけです。そして自分がかえるをたくさん入れて持っていたあきかんを友だちに持たせて、それの番をさせているわけです。ところがそこを少し開けておきますと、またガラガラッとだれかがのぞきに来たりするものですから「ちょっとね、外で待っててほしいから」と言って私がドアーを閉めて戻ってくるとH君の「園長先生のけち！」ということばが強くはねかえって来ました。「けち」ということは「もう少し見せてやってもいいのに」という私の考え方ややり方に対する反抗だったと思うんです。何か、ぴーんと子どもが感じるものに気づきました。そういう点から幼児というのは理屈ではなく、本当に常に全身で感じているのだ、ということを思うんです。

よく世間でいわれている「あの人は今何を考えているか、何を感じているか、私はすぐ当てることができる」というような非常に感受性の鋭い方がおられるようですが、だいたい感受性というのは、ある程度トレーニングしないとだんだん涸れていくとでもいいましょうか、あるいは心が自由に動かないで固まってしまっ

て感じることがにぶくなるように思うんです。がん固おやじと呼ばれる年齢になってくると、どうしても感受性がにぶくなってしまいます。そういう点で幼児というのは、いや人間は生れつき健康であれば柔軟でそういう感受性に恵まれているのではないかと思います。ただ、そういうものが涸渇しないように、自分である程度いろいろな機会をとらえてトレーニングしているのでしょうけれども、一般に教育の中でそういうようなものは身につけさせていくとか、豊かにしていくというものではなく、本来持っているものを絶やさないようにしていくことが、教育の中核ではないかなということを多くの機会に感じさせられました。たとえばこういうこともあります。皆さんが現場に出られて、きっといつもとちがった新しい装いで保育室に行かれると「先生きれいな服きてきたね」とすぐにぴんとくるわけです。それはけっしておしゃまさんでもなんでもないんです。そういう点の容姿の変化というものに非常に敏感に反応をしているわけです。そういうことから言って、常に何か見ているといいますか、常に感じているということをおそらく皆さんもすでにいろいろなところで経験されて感じておられるだろうと思います。このように考えてくるとほんとうにこわい感じがする時があります。幼児教育の中でこの幼児たちの感受性の発達を阻害してはいないでしょうか、私たちは人間味の核とでもいったような感受性をほんとうに育てているでしょうか。もう一度このことについてしっかり考えなおしてみたいと思います。またこのような感受性豊かな幼児たちに応じていくためには、どうしても私たち教師が自らの感受性を訓練していかねばなりませんが、自己の感受性についてどこでどのように自己訓練をしていますか。またどのような感受性を現在もっているか教師自身ご存知でしょうか。幼児と共に育ちたいものです。

・内的動機〝やろうとする意欲〟を尊重する

人間味を再発見したもう一つの面というのは……。現場に初めて出られた先生がよく次のようなことで私の所へ相談にこられるのです。「幼児たちのそばへ行くと、すぐ子どもたちが逃げてしまう。どうしたらいいのかわからない」と、つまり「どうも隣りの先生はうまくやっているのだけれども私がそばへ行って遊びの中に入ろうとしたり、何か言ってあげようと思って行くと、さあっといつの間にか子どもたちはそこにいなくなってしまっている。そこでいろいろやってみるがよい方法がみつからないし結局どうしたらいいのかわからない。」と、こう言った悩みが最初あるわけです。私がそういう時によく言ったことは……「いろいろやってみましたか」ってきくと「いろいろやってみました」という答がかえって来ます。

「じゃあ、先生ひとりで遊んでみるということをやってみました

か」って言うと「それはやっていない」というので、「それではいっぺんそれをやってみたら」ということで、さっそく先生のひとり遊びが始まるわけですが、そうするとほとんどの場合その日の放課後には「園長先生、きょうひとりで遊んでいましたらたくさん寄ってきました」という報告をきくことができます。先生がひとりで遊んでいると子どもは寄って来るんです。

これはどういうことかと申しますと、私たちの「教育する」という考え方の中には、外から相手を動かそうとする。つまりよく言われる「動機づけ」（モチベーション）というものが外側からばかり刺激するということのみに終始してしまっている。

ところが現在の教育を見ますとこのような動機づけが、一般の教育の考え方のなかに非常に強いわけです。しかし子どもが自分で――内的動機ということばがありますが――本当に内面からやろうという、そういう意欲によって動きだすことが、たくさんあるわけです。むしろ人間味というのはそれじゃないかということをそこで考えざるをえないわけです。幼児というのは自らで成長しようとする生命力と言いますか、そういうものが非常にあふれているんです。ある人はそれを衝動とか、欲求とか、言っていますが、何か衝動といいますと衝動的とか何とかであまりいい場合には使われないのでよいようには聞こえませんけれども、私はとっても大事なことだと思います。「よしやろう」とか、「何とかしたくてしょうがない」とむずむずするというようなものは、確かに生命力だと思うんです。あるいは成長する力と言ってもいいと思います。

そういうものが幼児にはちゃんとあるということ、もっと言えば人間にはそういう成長する力があるんだということが幼児を見ていると大へんよくわかります。

ちょっと脱線しますけれども、皆さんは、けがをされたことがありますか。もし大きな傷で傷口がぱっと開いているときは、とても家では処置できなくって、お医者さんに行って治療してもらいますね。消毒してもらって縫ってもらって、その時はお医者さんに治してもらおうと行くわけですね。ところがよく考えてみると、お医者さんのされる仕事というのは、ばい菌が入らないように消毒したり、その傷口がふさいでいくのを促進させる手助けをしてくれただけです。「お医者さんに治してもらった」と考えますが、なるほどある意味ではそう言えるわけですけれども、本当は自分で治したという事実があるわけで、言いかえれば「これは人間の中にある生命力が傷口をふさいだのだ」ということになるわけです。ところがお医者さんは自分で治そうとするのを手伝ってくれたのだと、そういうふうにはなかなか考えない。そういうものがたくさん、幼児たちとの接触の中で「これだな」と感じさせられます。私たちはもっともっとそういった内的動機といいます

か、子どもたちがやろうとする意欲といいますか、そういう力を見失わないようにそれを信頼して子どもたちに接触していかなければならないと思いわけです。このように何か私たちが見失いやすい所をもっと幼児と接することの中で見つけていきたいと思います。

成長する力といいますか、生命力という力がひとりひとりの子どものなかにどのように充実して来ているかを見ることと、同時に内にひそんでいるそれらの力を充実してくるようにふんいきをつくっていくことが教育の本質的な仕事だと思います。

・子どもの未熟さを肯定する—成長しているから未熟なんだ—

三つめは、子どもというのは成長を続けていますから、成長をつづけているということは未熟であって、そして、下手くそだと思うんです。ところが、どうも大人はすぐに上手にやってほしいと願うわけです。文部省のだしている指導書の中でも上手という言葉が、ところどころ見られて、技術的な面が強く出すぎてはしないかと感じるのですけれども。

たとえばこういうことがあります。入園間もないころにブランコに——ブランコとか、すべり台という遊具は遊園地とかそういう所で充分遊んでおりますから、幼稚園に入ってきてもこれなら遊べるというわけで、すぐにそういう所へ飛んでいくわけです。でもまあ入園間もないころというのは、すべての子どもがみんなスムーズに動けるかというと、そういうわけでもないんですけれども——ある金時のようないかつい子どもが乗っていたんです。そうするとだんだん「ぼくも乗りたい」「ぼくも乗りたい」という子どもが出てきて、これは当然ですね。慣れてきますとそういう時にはどうするかと言いますと、すぐ担任などの先生の所へ助けを求めに行くと言いますか、

「先生、ぼくも乗せてほしい」とか「乗りたい」と言って先生になにがしかの助けをもとめに来ます。なかには「先生、乗せてくれはらへん」とまあこれは関西弁ですけれども、乗せてくれないということを訴えに来るわけです。そうすると先生は合言葉で、そういう時にはおいそれと出ていかないことに、私のいた幼稚園では先生同志の約束ができていたわけですね。高い保育料を払っているのに、ここにいる先生はえらい面倒くさがっていて冷たい先生たちばかりだと親たちが見たら言うかもわかりません。

しかし先生方はすぐおいそれと助けてくれない。そうなりますと、私のいた幼稚園では男の園長だし、まためがねをかけた園長だからあの園長に言えば、たぶんでてきて何とか助けてくれるだろうと言うんで、四月の下旬から五月の上旬ぐらいになると、たくさん私のいる園長室のドアのところを、ガラガラッと少し開けてはのぞき込むわけです。「園長先生」と言うものですから、「何

だい」と言うと「先生、ブランコ乗せてくれはらへん」と言うわけです。「あっそう、ぼくはとってもブランコに乗りたいんだね」って、そういうふうに乗りたい気持ちはすぐくみますけれど、おいそれとは行かないんです。

しかし、切々としたような目つきで眺められると、私もやっぱり心を動かさざるを得ない時が時々あるわけです。「ぼく、どうしたらいいの」と聞きかえしてみると「言っただけでもういいんだ」と言ってそのままだっと走っていく子がいるんです。このようなときは「ききかえしてよかったな」と思うんです。そこが教育のみそみたいなもので、私はほっておく気はしないんです。後をそっとつけて、どうするかを見にいくわけです。運動場へ出るか出ないうちから「園長先生に言ってきたぞう」って言ってるわけです。これはもっと小さいころに、お母さんに言ってきたとか、うちのお父さんに言ってきたと言ったら大きいお兄ちゃんが乗ってたのが、とたんに降りたという経験があったのかもわかりません。言ってきたというだけで安心している子どももあるわけです。それがおどしになっているみたいですね。それでもなかなか乗っている子は降りようとしない。悠々と乗っている わけです。

何人かそういう乗りたい子どもが囲りを取り巻いていまして、やっとしてからとうとうその中のひとりが「ぼくも乗せてくれ」と言うことを、そのひとりで乗っている子に言ったわけですが、これがとても私は大事だと思うのです。乗っている子どもに自分の気持ちを伝えるという、私たちからすれば非常に簡単なことのようですけれども、その第一声がなかなかでないわけですね。先生に訴えたり、親に訴えたりすることはできるけれども、知らない友だちになかなかそれができない。ところが一人が言ったぐらいじゃなかなか降りる子どもばかりではない。何人かが「ぼくも乗りたい」「ぼくも乗りたい」と言って、やっとその子どもはしかたがないので降りたんです。降りたところがやはり自分はもう少しながく乗りたい。そこであるルールを考えつきました。「お前一番、お前二番、三番」と先生より上手に並べて、「お前から乗れ」と命令的に乗せるわけですね。その時に「数えるから、数えたら交替しろよ」って言って、友達が乗りますと「1 2 3 4 5 6 7 8 9 10、はい交替」「1 2 3 4 5 6 7 8 9 10はい交替」早口で数えるように言ってるわけですけれど、いよいよ自分の番になると「1・2・3・4・5・6・7・8・……」と、ゆっくりゆっくり数えているわけです。どうするかなと思っていたんです。おそらく何か変だなと思ってはいるでしょうけれども、それをどういうふうに言ったらいいのかわからないんでしょう。そのうちにその中の一人がやっと「お前、おかしいじゃないか、おれたちが乗る時は早く数えて、自分が乗る時はゆっくり数えるじゃないか」

っていうんで、その子はやっと自分本位のルールを修正していかざるを得なくなったわけです。こういうふうにして、ルールはできるんですけれども、全く自分本位のルールですね。でもルールによって若干相手も認めているわけです。しかしそのルールはとても下手くそです。おそらく大人がはたから見ておったら「この子は大きくなったら恐しい大人になりはしないか」というようなことを思うかもわかりませんね。

ところでこういうふうにして成長していくのだということは、未熟さからだんだんそれが修正されていく。それは先生によっても修正されますけれども、こういう友だちによって修正されるという場合がたいへん多いし、このことがまたとても大事なことだと思います。

あるいは、こういうことがありました。砂場で、五、六人の子どもが土手のようなものを作りました。そこに水をいっぱいいれて遊んでいたんです。ところがその、いつもどっちかというと、いやがられている子どもですけれども、その子がだっと走って来たかと思ったらその土手のところをじゃっとふんで、ぱっと風のようにどこかへ走り去ったのです。そこでどこにいるかと思ったら、運動場の角の方の小高い丘の上で、その後、事態はいかがなりやというようにじっとこちらを見ているわけです。

「先生！　先生！」って砂場の子たちは呼んでるわけです。先生は何事かと思って走って行きましたら、「Oちゃんがこういうふうなことやった」水がだっとそこからあふれているんですね。みんなで土手をなおしながらあふれ出る水を押さえようとしているわけです。やって来た先生がふと見ましたら、小高い丘の上に、おそらく先生から呼ばれるだろうというので、何かこうおかしな目つきで見ているわけです。このような場合、先生はその子を「ここへちょっといらっしゃい」と呼んで、その時に「どうしてふんだの」と聞くのはまあ普通ですね。でも、もうちょっと慣れてくると、「どうしてこんなことしたの」とは聞かないで、「ぼくは何がしたかったの」というふうに受け止められるようになってくると思います。

この時の先生は非常に慣れた先生で、「ぼくはどうしたかったの」って聞いたら、「砂場のここでいっしょに遊びたかったんだ」と言うので先生が、「この人みんなと同じことがしたいというていやはるから、仲間に入れてあげる？」ときかれると「いやだ」と即座に子どもたちが言うんです。「いつもいたずらばかりするし、今もこんなことやったから、そんないたずらをする子は入れないよ」と言うわけです。そこで更に先生が「ぼく、どうしたいの」ってきかれたら「ここの所に水をざっと出してダムみたいなのが作りたい」と言うんです。「ここにダムを作りたいといっているんだけれどダムのお仕事この人にさせてあげてくれない？」

って言ったところが「いやだ」って、どうしても受け入れない。「じゃあ、どこだったらいいの？」ってきかれたら「ここならいい」とその中の何人かが場所を指定してくれて、やっとその仲間に入れてもらうことができたわけです。

でもまあよく考えてみると、本当に仲間に入れてもらえたかどうかということは、その後の人間関係のようすを見ていないのでわかりません。「先生がああいうふうに言ったから、しかたがないから、ここでやってもらっておこう」というようなことだったかもしれません。どうやら、本当には仲間に入りきれないものが残っていたようですけれども、しかしまあ先生というのはこんなふうに子どもによっては職業安定所のようなことをしなければならない時もあるわけです。言葉が充分伝えられない、この伝えられないところでいわゆるいたずらのような結果が生まれているわけです。いやなことをやっている中には、「いやだ」「この人はいやなことをする」と訴えてくるような事件の中には、たいへん伝えることが未熟なために、相手に対してそういういやな思いをさせていることも相当多いように思います。

いつか私が廊下を歩いておりましたら、これは男の子ですがね、「園長先生、この人しつこいんだ」って言うんですね。ふと見たらかわいい女の子が、はたにべったりくっついているわけです。私は少し羨ましいなあと思いましてね（笑）こんなに好かれたらいいなあと思ったんですけれども。その子がしつこくて朝からつきまとわれているものだから、思うように遊べないんで、私に訴えたようです。

そういうような子は自分の思いや考えなどを他人に伝えることが未熟なために、サインのおくり方がつたなくて他人にきらわれたり、他人からいたずらだと言われたりしている場合が、たいへん多いように思います。

そういう所は皆さんから見れば、たいへん下手に見えるでしょう。でも私は、その下手なことをまず肯定してからかからなければいけないと思うんです。それをはやく上手にさせようとか、「どうしてそんな簡単なことが言えないんだ」なんて思うと、とっても子どもには耐えられないほどの目に見えない圧力のようなものになるわけです。私はむしろ—大人でもそうだと思いますけれども—未熟だということ、自分はまだ下手くそだということは、成長しつつあることなのだと思います。どうか皆さんもまだ未熟だと思われたら、私は成長しているから未熟なんだと思ってください。

・自己主張と思いやりのバランス

四つ目に申しあげたいことは、先ほどのブランコのことと一緒のようなこととなるかもしれませんけれども、これは私が長い幼

稚園生活の中で本当に感動した一つの事柄なのです。

私たちが幼児教育をやっているなかで、この衝動とか生命力とか、成長する力というものを、いわゆる自己主張とかまたは自己実現と言ってもいいのですが、自分のイメージを現実化していくような方向に育てていくことは大へん大事なことだと思います。でも、自己主張、自己実現だけでは足りないんで、やっぱり他人への思いやりというものが、それに呼応して出てこなければいけないと思うんです。

先に申し上げたブランコのルールの問題でも、そこで感じてくださったと思いますが、「いつまでも自分は長く乗っていたい」という自己があるんですね。乗りたいという自己がありながら、やっぱり他にも乗りたいと思っている友だちがたくさんいるわけなんで、それをどういうふうに位置づけていくか、またこの強い自己主張と、思いやりとのバランスがどのように育っていくかということがとても大事なことだと思うのです。そういうことを、幼児たちはスムーズにやってのけることができるのだということをいろいろな所で感じます。

一般にはまわりに対して調和していくような、また適応していくようなことが、たいへん考えられておって、その中で思いやりなどを自覚していくのだという考え方がたいへん多いみたいですね。でも私は、そういう二元論ではなく、先ほどもブランコの事例で申し上げたように、自己主張というものをやりながら、その中で思いやりといったようなものを、自分でバランスをもってやっていこうとしているように思えます。そういうものが見られて、よく一時は、自己主張なんてものがそうとう強くでてこなければ、思いやりなんてものはでてこないんじゃないかと思った時があります。

ある心理学などの発達なんかの中でも、そういうふうに説明されている向きもありますけれど、私は現実の子どもたちとの接触の中で「自己主張というものが、なるほど、しっかりできるということは、大事なことだ。しかしそのこととやはり相即して、思いやりといわれるものが芽生えて来ている」と感じました。ただ私たちは、自己主張の方はたいへんよくわかるんですけれども、思いやりの方は、なかなかその芽生えがつかめないんです。そういう所を、今まで見のがしていたんじゃないかと思います。

幼稚園の生活の中で、「ままごと遊び」というのは、ごっこの中でも一年を通じて子どもたちが喜んでやりますし、その中でいろいろな経験をするわけですが、やはり入園して間もないころには、ちょっとおしゃまさんのような女の子がいちはやくままごと遊びをします。私は教育委員会で指導主事をしておりました時も幼稚園に出かけていってその場面を見ておったんですけれども、あまり気がつかなくて、ままごと遊びよりは、人形遊びの方が主

かなと思っていたのです。現場に出て、子どもたちと毎日のように接しておりますと、そうじゃなくて、ごちそう作りの方に、どうやら一番子どもたちの興味や関心が強いように思われました。で、ままごとコーナーで、そのようすを毎日のようにずっと見ておりますと、毎日だけでなく、毎年のようにでて来る問題は、そのごちそう作りの時の包丁をめぐっての問題です。朝八時ごろには女の子が何人か来て、せっせと遊んでいるので何をしているのかなと思い見てみると、ごちそう作りを始めているわけなんです。そのためにだんだん早く来るようになったので、先生が来ないうちに来てけがでもされるとこまるということで、登園時刻を八時半に制限しました。そうなりますと、来るのがだいたい一緒になるので、テラスの所でかばんをはずしながら、「うち菜切り包丁」って言ってるわけです。「ほあん、菜切り包丁がほしいんだな」と思って見ていますと、勇敢で元気のいい女の子が、かばんをまだ自分の身体からはずすか、はずさないうちに、菜切り包丁を取りに行って、そして、やおら自分の道具を掛けて、そうして遊びを始めるわけです。

ところがそういうことをやっているうちにもう本当に競争になってしまいました。ライバルがたくさんでてくる。そこである子どもは考えたのでしょう。「うち、お母さん」って名乗ったんです。「うち、お母さん」って名乗ったら、菜切り包丁は、もうゆうゆうとかばんを掛けに行っても、役割は決っているから、大丈夫なわけです。「あっそうか、〃お母さん〃と言えば菜切り包丁が使えるんだな」と囲りの子はそう感じたのでしょう。そこで次から次と、一番お母さん、二番お母さんと、一つのコーナーにたくさんお母さんができました。お母さんが五、六人いても別に不思議にも思っていません。

ところが途中でお便所にでも行って帰って来たら、ちゃんと第二のお母さんが使っているわけです。なかなか返してほしいといっても返してもらえないわけです。お母さんだから、やはり。

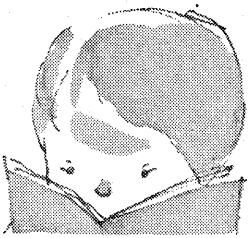
困ったあげく、その次の日になってどうしたかと言いますと、その第一のライバルらしき子どもを、ちゃんと位置づけました。「あんた、お姉さんになり。(なりなさい) うち、お母さん」ってね。お姉さんと、お母さんという区別をはっきりこしらえておけば、別に、お便所に行って帰ってきても、「お母さんよ」と言って包丁をとりもどせるわけです。実に、子どもというのはすばらしいなと思ったんです。

そうすると今度は、第一お姉さん、第二お姉さんとたくさんでてきます。しまいには、「あんた赤ちゃんになりなさい」と、赤ちゃんもでてきました。

こういうのを「役割遊び」とよく言いますけれど、よく今まで、ごっこというのは大人の生活を真似しているんで、その真似

しているなかで、家庭の中にはお父さんがあり、お母さんがあるということから、役割が出てくるんだと、考えていたんです。でも、そうじゃなくて、自分の一つの遊びの位置づけと言いますか、自分の足場を固めるために、その相手を自分とはっきり区別して位置づけていくとこに関連して役割が理解されていくということがわかって来ました。

したがって役割あそびというとき単に社会事象の認識としての役割としての役割理解のみでなく、こうした子どもたちの人間関係が根強くその背景にあること、しかも秩序づくりを学んでいくことがこの経験最中にあることをあらためて理解しなければなりません。私はこれは子どもが自然に考えてつくっていく一つの秩序づくりだと思うんです。さっきのブランコの例では、一つのルールという秩序づくりがありましたけれど、今度は役割をお互いがうけもつということによって秩序づくりを学んでいくこと、つまり子どもたちが自他の区別をはっきりさせながら位置づいて相互に自己主張をやり、自己実現をしながら、他人の自己実現をも認めようとしていっているわけです。それは本当にすばらしいことだと思います。これは、大人が子どもの時に経験したことかもしれませんが大人にはとっても真似できないことを幼児たちは堂々とやってのけているわけです。こんな事例があちこちにたくさんみられます。



（大津市教育研究所）

—つづく—

幼児の教育　第七十三巻　第三号

三月号　©　定価一七〇円

昭和四十九年二月二十五日印刷
昭和四十九年三月　一　日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします